

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009～2011

課題番号：21240023

研究課題名（和文） 歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究—写真資料を用いた華族社会構造の解析—

研究課題名（英文） The study of social model of the nobility in Meiji era, based in historical informatics

研究代表者

馬場 章 (BABA AKIRA)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10208704

研究成果の概要（和文）：国内外の名刺判写真の悉皆的な所蔵調査を行ってデジタルデータ化し、デジタルデータを活用した調査研究結果を通じた名刺判写真の生産・流通・消費・保存プロセスの分析と印刷媒体への接続、それによるパブリックな視覚的イメージの生産に注目し、それらが指し示す明治期の社会的高位に属する人々のコミュニケーションモデル、社会モデルの再構築を試みた。これらを通じ、写真資料という、従来歴史資料としての活用が不十分であった資料から読み解くことのできる「歴史情報」とそれに基づいた新たな歴史像、社会像を構築するための基礎を築いた。

研究成果の概要（英文）：We completed enumeration survey to the visiting card size photographs (otherwise known as "Carte de Visite" in French) in Japan and outside, and digitized them. Through our research results using digital data of them, we analyzed the process of saving, consumption, production and distribution of visiting card size photographs, and focused on the production of visual image and its connection to the public through the print medium. We tried to rebuild communication model and the social model of people who were well-placed socially in the Meiji era. Through these researches, we decoded "historical information" from photographic materials that were ever utilized inadequately as historical materials to lay the foundation for building the new historical and social image.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	13,300,000	3,990,000	17,290,000
2010年度	11,800,000	3,540,000	15,340,000
2011年度	11,200,000	3,360,000	14,560,000
年度			
年度			
総計	36,300,000	10,890,000	47,190,000

研究分野：歴史情報学

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：名刺判写真、歴史写真、歴史情報、華族、集合写真

1. 研究開始当初の背景

我が国において、幕末から明治にかけて撮

影された写真に関しては、近年になって漸く本格的な調査や収集が進展し、その基礎的な調査結果が蓄積されてきた。海外においても、日本国内及び国際的な写真流通に関する調査が行われており、日本学研究の拠点ではあらためて幕末明治期の写真資料に対する関心が高まっている。近年では写真師の実像やその写真技術に関する研究、さらに調査対象となった写真資料の撮影年代、撮影技術、被写体に関する実証的推定などが行われ、それらのデータを集積したデジタルアーカイブの構築も行われてきた。

こうした撮影にまつわる情報や被写体に関する基礎的な情報が蓄積されてきた一方で、現存する数多くの幕末明治期の写真がいかなる「目的」や「用途」によって撮影され、人々の間で流通していたのか、また、どのようにして受容され、さらに現代まで保存・継承されてきたか、という側面からの研究は現在もほとんど着手されていない。また、写真が使用された歴史的な状況とともに、写真が担った社会的機能に関する分析もいまだ十分とは言えない。さらに、研究対象となる写真資料の所在調査もいまだ網羅的には行われていない。特に、各地の公的所蔵機関などの収蔵品に含まれていない、旧華族などの写真資料は、実情の不明な点が多い。これらの資料所蔵状況調査とともに、これまであまり明らかにされていない収集家の個人コレクションを含めた調査も同様に進展させる必要がある。

写真の「目的」や「用途」、流通の実態の分析を行うにあたり、本研究において着目するのが、幕末から明治中期にかけて撮影され、流通した写真の中でも大きな比率を占める「名刺判写真」である。名刺判写真は、欧米の風習に則り、皇族や華族、政治家や政府高官などの高位の階級、一定の共同体にある名士が挨拶時に贈与・交換した名刺サイズの写真とされる。だが、国内外のどの資料群の中にいかなる人物の名刺判写真が存在し、写真を通してある人物が他者とのいかなる接点を持ちえたかを分析した研究は極めて乏しい。また、明治期の社会的高位にある人間相互の交流を書簡から解明しようとした先行研究はあるものの、文字資料から推定可能な関係性は、資料所有者の恣意的な取捨による影響を免れない。これに対し、写真の交換や家族アルバムへの名刺判写真の組込みなどは、時に取捨の痕跡をも追跡可能な場合がある。さらに、当該行為を通じたコミュニケーション形態がこの時代特有の習慣であることから、文字資料とは異なる人間の関係性や社会風俗のモデルを物語るものが期待された。

そのため、本研究課題では、これらの名刺判写真を研究の対象として、その写真の成り

立ちと製作の過程、さらに交換の実態を調査し、写真という媒体を通しての人間相互の交流の実相を、写真から捉えられる歴史情報によって明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

我が国の幕末から明治中期にかけて撮影され流通した写真の中でも大きな比率を占める「名刺判写真」は、欧米の風習に則り、皇族や華族、政治家や高官などの高位の階級、一定の共同体にある名士が挨拶時に贈与・交換した名刺サイズの写真である。明治期の社会的高位にある人々による名刺版写真の交換や家族アルバムへの名刺判写真の組込みなどは、当該行為を通じたコミュニケーション形態がこの時代特有の習慣であることから、文字資料とは異なる人間の関係性や社会風俗の視覚的、具体的有り様を物語るものが期待された。本研究課題では、名刺判写真を研究の対象として、(1)写真の成り立ちと製作の過程、交換の実態を調査する、(2)写真という媒体を通しての人間相互の交流の実相を明らかにする、(3)写真から捉えられる歴史情報によって既存の研究におけるヒューマンネットワークとの異同を分析する、以上の三点を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 基礎的な写真資料の所在調査

基礎的な写真資料の所在調査については、現在、研究代表者の研究室で把握している所在状況を基礎とし、国内外の公共資料保存施設・個人コレクター・個人宅の網羅的調査を行った。幕末明治期の旧華族やいわゆる名士旧華族のネットワークは現在も(社)霞会館を中心にかなりの程度存続していることから、これらを手掛かりとして旧華族の私邸に現在も保管されている写真資料の追跡調査を行った。また、個人収集家に関しては、森有礼の個人アルバムを所蔵している石黒コレクション保存会の石黒敬章氏やその周辺の収集家に接触し、関東圏に留まらず、関西・九州方面の収集家とも接触をもちながら、協力的な写真収集家に関する写真資料所蔵状況調査を実施した。

(2) 名刺判写真を中心とした贈与・交換ネットワークに関する研究

名刺判写真を中心とした贈与・交換ネットワークに関する調査の前提として、歴史学的、史料学的方法によって従来解明された歴史的人物の人間関係把握とそこから導き出される社会構造理解のありかたを把握することにつとめ、幕末明治期のヒューマンネットワークの変容が歴史学の領域においてこれ

までどのように把握されてきたのかを理解するとともに、そこで活用されてきた資料の所在と来歴に関する調査の動向に配慮しつつ、名刺判写真に基づくヒューマンネットワークとの相違点をより先鋭化させた。旧華族など社会的高位層の資料状況の把握は、近年の『近現代日本人物史料情報事典』（吉川弘文館）によってより整理されたので、それらの成果も積極的に援用した。

(3) 写真資料のデジタル化、閲覧システムの検討

研究代表者の研究室では既に写真資料を「歴史写真」（多様な歴史情報をデコードすることのできる写真）として活用するためのメタデータは整備されているため、構築されたルールに従って新たな写真資料からのデータ格納を推進した。本研究課題では、写真原資料の使用頻度を下げて原資料の劣化を遅らせるために、写真をデジタル化して複写することは不可欠であった。さらに、Aという所蔵元に保管された写真A'とBという所蔵元に保管された写真B'とを比較する場合、原資料同士で比較することは資料保全の点で不可能であるため、原資料を高精細にデジタル化した複写画像を用いて比較研究を行う必要があった。情報処理技術を用いた画像解析による写真資料の比較研究のためにも写真原資料のデジタル化は重要であり、所蔵者より写真を借用した際、および写真資料の現地調査の際には、専門写真家によるデジタル撮影を実施した。

4. 研究成果

本研究課題においては、集合写真や記念写真の予備調査の段階で、明治期の華族（特に新華族）は薩摩・長州の二大藩閥に実権を握られていたことが写真の歴史情報からも判明したため、特に旧薩摩藩出身者と旧長州藩出身者の華族写真を中心に、写真の所在調査、被写体情報調査、写真に関する文書や口伝等（文字・言語情報）の調査を行った（被写体情報や文字・言語情報はともに写真資料の歴史情報である）。調査対象を旧薩摩藩出身者と旧長州藩出身者に限定したのは、本研究課題の期間や人員の規模を考慮しつつ、研究の効率性を考え、薩摩・長州の二大藩閥に絞ったほうが得策だろうと結論付けたからである。写真資料の現存状況や子孫へのアプローチのし易さを考慮して、薩摩閥の大久保利通家所蔵写真、長州閥の伊藤博文家所蔵写真、さらには二大藩閥と関係の深かった旧公家・旧大名家の岩倉具視家所蔵写真と旧福井藩松平家所蔵写真を重点調査対象とし、現存写真の概要調査とデジタル化作業を推進した。また、後に華族となる薩摩藩・長州藩の

有力藩士や公家・諸大名の子弟が数多く留学した米国ニュージャージー州立ラトガース大学（最初期の日本人留学先）の、日本人留学生が被写体となっている歴史写真のコレクションを調査し、同大学に残された名刺判写真から、華族交流の端緒とも言える最初期留学生の共同体を分析した。以上の点から得られた研究成果としては、名刺判写真とともに各家に残されている、集合写真の存在確認とその意味性解明への手掛かりの発見である。当時の政治家、財界人、軍人などが写るそれらの集合写真には各家の当主が写るのはもちろん、当主と当主が属する共同体との関係性、また人物同士の心情的繋がりが人物と人物との物理的位置関係から推測できる可能性があることが写真資料の調査から顕かとなった。ある共同体内における人的交流の広がりや名刺判写真の種類と残存数の調査、および集合写真のメンバー構成と写真に写る人物達の立ち位置の調査とを合わせたことで、より深層的な華族内の人間関係や華族共同体の有り様が解明された。

さらに、名刺判写真の性質とその運用および活用に関する歴史的経緯の研究を行った。フランスで生まれた名刺判写真が日本社会においてはどのような形で写真師たちの間で導入され、どのような形で華族社会に普及していったかについて、今回の調査及び分析で、その端緒を内田九一（1844～1875、幕末から明治初期に掛けての著名な写真師で史上初の天皇の公式写真である明治天皇「御真影」を撮影）に求めることが可能となった。華族制度発足以前においては、内田九一によって撮影された名刺判写真とともに各家に残されている集合写真が後に華族となった家々の交流関係を計る上で重要な役割を果たしていることが判明し、内田の死後は、内田の役割を他の写真師が担うことによって、華族制度以前の写真の役割が、継続的に華族制度発足後に受け継がれていることを発見したのも本研究課題の大きな成果と言って良いだろう。

また、華族制度発足以後は名刺判写真より一回り大きいサイズの「手札版写真」が華族社会の中では名刺判写真と同等もしくはそれ以上の役割を果たしていることが解明された。そのため、それまでの調査結果を踏まえ、名刺判写真および手札版写真、集合写真の分析によって取得された歴史情報から、どのようなモデルが析出されるのかを明らかにすることに力を置いた。データベースやそれを活用した調査・研究結果を通じた名刺判写真の生産・流通・消費・保存プロセスの分析と印刷媒体への接続、それによるパブリックな視覚的イメージの生産に注目し、それらが指し示す明治期の社会的高位に属する人々のコミュニケーションモデル、社会モデ

ルの再構築を試みた。これらを通じ、写真資料という、従来歴史資料としての活用が不十分であった資料から読み解くことのできる「歴史情報」とそれに基づいた新たな歴史像、社会像を構築するための基礎を築けたことは本研究課題の最大の成果と言って良い。

なお、本研究課題の成果の中でも特に着目すべき点を書籍としてまとめ、2012年9月に出版する予定である。また、本研究課題遂行中に新たに発見した資料や関連資料に関して、新規の研究資金を獲得し、引き続き調査を進めて、広く紹介していく計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 佐藤健二、柳田国男と「写真」、写真経験の社会史、査読無、岩田書院、2012 (掲載予定)
- ② 馬場章・研谷紀夫、デジタルアーカイブから知識化複合体へー三基盤からとらえるデジタルアーカイブとその深化ー、つながる図書館・博物館・文書館、査読無、東京大学出版会、2011、pp.169-200
- ③ 添野勉、Basil Hall Chamberlain old stock photography books、東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターニュース、査読無、第21号、2011、pp.11-14
- ④ 研谷紀夫、公葬のメディア表象の形成と共同体におけるその受容と継承ー伊藤博文の国葬における新聞・雑誌・絵葉書・写真帖を中心にー、共立女子大学文芸学部紀要、査読無、第58集、2011、pp.37-57
- ⑤ 倉持基、情報学的視座から見る歴史写真研究、港区立港郷土資料館研究紀要、査読無、第12号、2010、pp.132(1)-127(6)
- ⑥ 研谷紀夫・川島隆徳、人名典拠情報のAPIによる共有化と図像資料における人名情報システム、人文科学とコンピュータシンポジウム論文集、査読有、No.15、2010、pp.91-96
- ⑦ 研谷紀夫、社会的ネットワークを重視した人名典拠情報の構築ー戦前期の写真師を対象とする人名典拠を中心としてー、アートドキュメンテーション研究、査読有、No.17、2010、pp.31-52
- ⑧ 倉持基、「フルベッキ写真」と幕末明治期の長崎の学校ー歴史資料としての古写真ー、古写真研究、査読有、第3号、2009、pp.37-44
- ⑨ 鈴木栄樹・松田好史・山下大輔・馬場章・

吉川英佐、史料紹介ー岩倉具定関係文書(書翰の部1)、京葉論集、査読無、第16号、2009、pp.1-18

[学会発表] (計4件)

- ① 馬場章、Die Historischen Photographien der Trautz-Kollektion an der Universität Bonn (Japanologie) (ボン大学日本学専攻が所蔵するトラウツコレクションの歴史写真)、JSPS-Abend、2011
- ② 倉持基、岩倉使節団の群像ー歴史写真からの発見ー、米欧亜回覧の会、2010
- ③ 倉持基・松田好史、大久保家所蔵歴史写真に見る大久保利通の顔、フォーラム顔学2009 (第14回日本顔学会大会)、2009
- ④ 馬場章・添野勉・研谷紀夫・倉持基・青木淳子、Decoding Photograph: Practice of Historical Information Studies (写真の「読み方」~歴史情報論の視座からみる写真資料研究の実践)、カルチュラル・タイフーン2009 (INTER-ASIA CULTURAL TYPHOON)、2009

[図書] (計3件)

- ① 馬場章・倉持基、渡辺出版、内田九一歴史写真集成、2012、256 (刊行予定)
- ② 石川徹也・根本彰・吉見俊哉、東京大学出版会、つながる図書館・博物館・文書館ーデジタル化時代の知の基盤づくりへ、2011、280
- ③ 渋谷雅之・石黒敬章・倉持基・土方愛・森重和雄、渡辺出版、英傑たちの肖像写真ー幕末明治の真実ー、2010、257

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://chi.iii.u-tokyo.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

馬場 章 (BABA AKIRA)
東京大学・大学院情報学環・教授
研究者番号：10208704

(2) 研究分担者

吉見 俊哉 (YOSHIMI SYUNYA)
東京大学・大学院情報学環・教授
研究者番号：40201040

佐藤 健二 (SATO KENJI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50162425

五百旗頭 薫 (IOKIBE KAORU)
東京大学・社会科学研究所・准教授
研究者番号：40282537

添野 勉 (SOENO TSUTOMU)
国立民族学博物館・外来研究員
研究者番号：20436512

研谷 紀夫 (TOGIYA NORIO)
関西大学・総合情報学部・准教授
研究者番号：00466830

(3) 連携研究者

木下 直之 (KINOSHITA NAUYUKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：30292858